

白山ふるさと文学賞

第三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

パンジーゼラニウム

翠星高等学校二年

杉山 すぎやま

未奈 みな

私が小学四年生のときのある冬の朝、とても寒い日だったのを今でも覚えています。目が覚めると母は病気になっていました。前日まで優しく強かった母は別人のようになっていました。

原因がコレというようにはつきり確定することができず責任の押し付け合いがおこりました。私は幼い弟の前で言い争う大人たちに幻滅しました。私はそれまで大人は完璧な存在だと思っていたのでもとてもショックでした。それと同時に、私は無意識のうちに母に負担をかけていたことに気がつきました。母は完璧主義な人で家事をいつだって完璧にしようとしていました。私はそれを当り前だと思っていて手伝いをしたり母を気遣って休ませてあげることができていませんでした。母が病気になって、家事がとても大変なものだということが身に染みてわかりました。それから母がどれだけ無理をして家事を完璧にしようとしていたのかも。つまり母が病気になってしまった責任は私にもあり、きつと母の側にいた人間全員に多かれ少なかれ責任があるのです。みんなが無意識のうちに母に負担をかけたり母を傷つけてしまったりした結果なのだと思います。

私が中学一年生のころの話です。私はいじめにあい不登校になってしまいました。今思うといじめはきつかけでしかありませんでした。私は疲れていたのです。家庭の雰囲気が悪くならないように必死に笑顔で振る舞い父や祖母の愚痴を聞いて「あなたがしつかりしてくれないと困るの。」だとか「姉さんなんだからがんばってもらわないと困る。」などの言葉を言われ続けることに。人の顔色を異常なまでに気にして振る舞う自分が酷く滑稽に思えました。急にすべてがどうでもよくなりました。そのとき母は薬のおかげで家事などをすることはできませんがしつかり会話ができる程度に回復していました。みんなが私に手を焼いていたと思います。しかし母は私を無理矢理学校に引きずってつれて行きました。当時はなぜこんなに酷いことをするのだろうと思っていました。私は別室の教室に通うことになりました。そこには同じようにいじめなどで教

室に入れなくなった子たちがたくさんいました。最初は母に無理矢理毎朝つれていかれていましたが教室に通うにつれて友達ができ自分から学校に行くことができるようになりました。二年生からは普通の教室に戻ることができ無事に中学校を卒業することができ高校に入ることもできました。あのとき母が無理矢理にでも学校につれて行ってくれなかったら友達もできなかつたし高校にもいくことができなかったかもしれせん。病気になっても母は母なのだと思います。感謝という言葉では足りないぐらいに感謝しています。

ここ数年で母の病気はかなりよくなりました。家事ができるようになって薬の量も減りました。治ったのではないかと思うこともあります。けれどもまだリハビリ中だということを忘れてはいけないとお医者さんに言われました。このため私はたまにどうしようもなく不安になることがあるのです。また母はあの冬の日のように突然病気になってしまうのではないかと、私の言動が気がつかないうちに母を傷つけてはいないだろうかなどと考え眠れなくなってしまうことがあるのです。悪い方向に考えてしまう私の悪いくせで直さなければいけないと思いつつなかなか直りません。我ながら情けないと思います。

こういう話をすると大抵の人は同情するか不幸自慢はいらないよと言うのですが私は自分をべつに不幸だと思つたことはありません。確かにいままでの私の人生を年表にすると安っぽいドラマのようですが。これだけ多くの経験をしていれば辛いことがあってもあのときよりはと耐えることができます。ラテン語の格言にあるように不運であると考えなければ何も不運ではないのです。何事も人生経験なのだからむしろ感謝しています。

私は最近ガーデニングを趣味にしています。来年の母の日には日頃の感謝と病気がよくなったお祝いもかねて花をプレゼントしようと思っています。カーネーションもいいと思いますでしたが私はパンジーゼラニウムを母に贈ろうと思います。なぜかというパンジーゼラニウムの花言葉

のほうが私の母へのおもいに合っている気がしたからです。パンジーゼ  
ラニウムの花言葉は

「あなたを深く尊敬します。」

母の病気が一日も早く完治しますように。

